

浄雨

雨の上がった浜辺には
冷たい微風が瞑想していた

彼女は何も衣服をまとわず
雲間からかすかに差し出された光の腕に抱かれていた

海原には未だにうねりがあった
それは彼方の小舟が大きく揺られていることで察せられた

現在を脅かす者は誰ひとりとして存在せず
この部屋では静寂と、冷んやりとした空気とが化石となっていた

僕は創造を強いられていたが
誰がそれを強いているのかは皆目見当がつかなかった

彼女は常に飲み干す者であったが
僕には彼女の喉の渇きを癒すことはできなかった

湿った砂がこの部屋と生活とを隔てていた
僕達には既に戻る術は失われていた

ひと月もの間絶え間なく降り続いた雨は、僕の中で
放浪への憧れと、放浪の空しさとの抱擁を成就させていた

この僕をここに引き留める者は今や誰もいない
そしてまた、出発すべき理由も今や何もない

ああ、生の嘗みとは正しくこういうものが
こうして人は生に留まるものが

(1991.10.29)